楽器学者太田太郎――その生涯と業績――

山寺三知

一、はじめに

太田太郎という楽器学者を知る人は、それほど多くはないであろう。現在、楽器を分類する際に世界で広く用いられている四分類、すなわち Idiophone, Membranophone, Chordophone, Aerophone の訳語「体鳴楽器」、「皮鳴楽器」（後世「膜鳴楽器」と改められる）[1]、「弦鳴楽器」、「気鳴楽器」を考案した人物[2]が彼である。

太田太郎（一九〇〇年十月二十九日―一九四五年八月二十五日）は、もと東京音楽学校（東京藝術大学音楽学部の前身）の教授であり、戦前・戦中に活躍したが、彼は研究者・教育者のみならず、音楽評論家、放送人等、様々な顔を持つ。これまで、声楽家である荻野綾子（一八九八年十一月二日―一九四四年十月十二日）の夫[3]として、あるいは音楽博物館建設運動に尽力した人物[4]として取り上げられているものの、彼がライフワークとしていたのは楽器学であるにもかかわらず、その学術的な面については、比較音楽学の専攻者・紹介者[5]として、あるいは東京藝術大学附属図書館蔵「太田文庫」の旧蔵者[6]として言及されるほかは、あまり知られてこなかったようである。

近年、筆者は、科学研究費の研究課題において東洋音楽学者の林謙三旧蔵書を調査する機会に恵まれたが、その過程において、偶然にも蔵

書の中から楽器学に関する太田の自筆ノートや太田太郎旧蔵の楽器学関連の洋書・和書、クルト・ザックス著・太田太郎訳補『印度とインドネシアの楽器』の校正紙等を発見したのである。[7] これらの資料は、「太田文庫」所蔵資料を補うものとして貴重なものと言えるが、まだ整理の途上であり、十分な調査を行うことができていない。そこで本稿では、まず、それらの資料の今後の整理・調査の準備を兼ねて、彼の年譜と業績目録を作成し公開するとともに、それらに基づいて、楽器学者、そして東洋音楽学者としての太田太郎の学問を概観することにした。ここに諸賢の批正を仰ぐ次第である。

二、太田太郎の経歴について

太田太郎の略歴については、『東洋音楽研究』第一輯（一九三六年）の「同人紹介」（一一〇頁）[8] や『田辺先生還暦記念 東亜音楽論叢』（一九四三年）の「執筆者略歴」（二頁）、芸術研究振興財団東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻』（東京：音楽之友社、二〇〇三年）教職員の履歴事項（一三三五頁）等があるが、本稿では、それらの資料を骨格としつつ、そこにその他の諸資料によって諸情報を補足し、また、該当する年代に、楽器学に関する彼の事跡と、その当時の世相を示した文言（墨付き括弧に入れて表示）を追記し、以下のような年譜を作成した。以下、特に注記のないものについては、基本的に上述の三書に拠る。また、太田太郎の業績については、レイアウトの都合で、本稿末に「太田太郎業績目録（稿）」として掲載した。併せて参照されたい。[9]

年代	西暦	月日	年齢	事跡
明治三十三年	一九〇〇	十月二十九日	零歳	東京市に生まる。父親は太田為三郎（一八六四―一九三六）、母親は太田とふや（また「トヤ」とも）。東京市本郷区駒込曙町七。[10]
時期不明				東京市誠之尋常小学校。
大正九年	一九二〇	三月	一九歳	私立東京開成中学校を卒業。

大正十二年	一九二三	三月二十四日	二二歳	東京外国語学校独語学科文科を卒業。
		四月	二二歳	東京帝国大学文学部美学科選科に入学。
		九月一日	二二歳	【関東大震災】
大正十三年	一九二四	三月	二三歳	東京帝国大学文学部美学科選科を退学。
		四月	二三歳	東北帝国大学法文学部に入学。
昭和二年	一九二七	三月三十一日	二六歳	東北帝国大学法文学部を卒業（美学専攻）、文学士卒業論文は「リーマンの標題楽に関する見解に於いて」。東北帝国大学助手に任ぜらる。

学生時代における主な指導者[11]：

大塚保治（東京帝国大学教授、美学。一八六九―一九三一）、阿部次郎[12]（東北帝国大学教授、美学。一八八三―一九五九）、児島喜久雄（東北帝国大学助教授、のち東京帝国大学教授、西洋芸術史。一八八七―一九五〇）、小宮豊隆（東北帝国大学教授、西洋文学。一八八四―一九六六）、千葉胤成（東北帝国大学教授、心理学。一八八四―一九七二）、乙骨三郎（東京音楽学校教授・東北帝国大学講師、音楽史。一八八一―一九三四）、信時潔（東京音楽学校教授、作曲。一八八七―一九六五）、片山頴太郎（宮城県師範学校、のち東京音楽学校教授、作曲。一八九四―一九七五）

昭和三年	一九二八	一月三十一日	二七歳	東北帝国大学助手を依願免官。
		十月二十四日	二七歳	独語につき高等学校高等科教員無試験検定合格者として免許状を取得。
		時期不明		近衛歩兵第三連隊在営。
昭和四年	一九二九	九月二十日	二八歳	高野山大学教授に任ぜらる（ドイツ語）。
昭和五年	一九三〇	三月三十一日	二九歳	予備役陸軍歩兵少尉に任ぜらる。正八位に叙せらる。
		九月二日	二九歳	高野山大学教授を依願免職。
		九月十日	二九歳	東京音楽学校講師嘱託（音楽史・美学・ドイツ語。図書課幹事心得[13]）。第四臨時教員養成所講師嘱託（音楽史）。
		十二月十七日	三〇歳	東京音楽学校助教授に任ぜらる（音楽史・美学・ドイツ語。評議員。音楽史及び外国語科主任心

	時期不明		得。図書課幹事心得）。
昭和六年	一九三一	一月十二日	三〇歳	官立東京高等学校（一九三四年まで、講師、教授。音楽史・美学。ドイツ語主任。図書課主幹。管弦楽部委員）[14]。
		二月二日	三〇歳	第四臨時教員養成所教授を兼任せられ（音楽史）、高等官七等に叙せらる。第四臨時教員養成所楽器調律方嘱託。
		九月十八日	三〇歳	従七位に叙せらる。
昭和七年	一九三二	三月	三一歳	【満洲事変勃発】
				【満洲国建国】
		三月三十一日	三一歳	東京音楽学校教授に任ぜられ（音楽史・美学・ドイツ語。評議員。音楽史及外国語科主任。図書課幹事。管弦楽部事務委員）、高等官七等に叙せらる。
		七月一日	三一歳	クルト・ザックス（一八八一―一九五九）の *Die Musikinstrumente* (Breslau: Ferdinand Hirt, 1923) の抄訳（第一章と第二章第一節まで）を「楽器史概説」[15]と題して、連載開始（全六回。一九三三年十二月一日まで）。
昭和八年	一九三三	三月一日	三二歳	高等官六等に陞叙せらる。
		四月十五日	三二歳	正七位に叙せらる。
		十一月	三三歳	日本教育音楽協会主催「音楽展覧会」（会期：十一月十一日～十九日、会場：東京日本橋白木屋）において委員として貢献[16]。
		十二月十日	三三歳	「史的に観たる楽器の意義」を発表。
昭和九年	一九三四	七月二十六日	三三歳	東京音楽学校教授を依願免官[17]。
		八月二十二日	三三歳	荻野綾子との結婚を発表[18]。
昭和十年	一九三五	時期不明		この年、ＡＫ（社団法人日本放送協会東京放送局）洋楽曲選定委員となる。

昭和十一年	一九三六	夏	三四歳	旅順・奉天（現在の中国遼寧省瀋陽市）・新京（現在の中国吉林省長春市）・ハルビン・北平（現在の中国北京市）の博物館・図書館・研究所等を視察す。[19]
		七月十五日	三五歳	東洋音楽学会が設立され、同人として参加。[20]
		十月一日	三五歳	「楽器の形態的模倣呪と東亜に於けるその管見」を発表。専門分野「楽器の文化史的実証的研究を中心とす」。[21]
昭和十二年	一九三七	四月上旬	三六歳	文部省嘱託により欧米の音楽公共施設の視察に出発（一九三八年三月に帰国）。その間、ドイツ、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、フランス、ベルギー、オランダ、イギリス、イタリア、スイス、オーストリア、ハンガリー、アメリカ合衆国等を歴訪。[22]
		六月二十八日～三十日	三六歳	日本代表として国際児童音楽協会パリ会議に出席。[23]
		六月	三六歳	パリにてクルト・ザックスと面会。[24]
		七月七日	三六歳	【日中戦争開戦】
昭和十三年	一九三八	二月	三七歳	ニューヨークにてクルト・ザックスと再会。[25]
		三月四日	三七歳	欧米視察より帰国。[26]
		三月二十四日	三七歳	日本放送協会業務局文芸部洋楽課長（初代）に就任。[27]
		六月一日	三七歳	「ザックス博士との会見記」を発表。
		十一月	三八歳	【東亜新秩序】
				この年から一九四〇年まで、欧米で得られた、音楽に関する様々な知見・所感を各雑誌・新聞において発表。楽器学関連では、この年の七月二十五日と十二月二十五日に「欧米音楽行脚の覚書から（上）」、「同（下）」を発表。
昭和十四年	一九三九	三月二十七日	三八歳	音楽博物館建設準備委員会発足。常任委員となる。[28]

	六月十六日～七月二日		音楽博物館建設準備委員会と東京科学博物館の共同主催により、東京科学博物館において「東亜音楽文化展覧会」（東亜楽器展及び東亜音楽講演・実演）が開催さる。太田は、中国・日本の楽器数点を出品。[29] 六月十六日に講演の予定あるも、都合により、黒沢隆朝による代講となる。[30]
昭和十五年	一九四〇		三九歳	【大東亜共栄圏構想】
昭和十六年	一九四一	一月十八日	四〇歳	日本放送協会業務局音楽部長（初代）に就任。[31]
		十二月八日	四一歳	【太平洋戦争開戦】
昭和十七年	一九四二	二月十日	四一歳	病気のため日本放送協会を休職。[32]
		六月一日	四一歳	「ザックス博士の業蹟」を発表。
		七月二十九日	四一歳	日本放送協会を退職。[33]
昭和十八年	一九四三	八月八日	四二歳	「マイヨン四綱楽器分類法の源流として観たる印度の楽器分類法」を発表。専門分野「比較楽器学を専攻、特に日本を中心とした楽器の組織学的研究を目的とす」。[34]
		十月	四二歳	北海道帝国大学札幌博物館（一日）、胆振白老村（二、三日）にてアイヌ楽器の調査。[35]
昭和十九年	一九四四	五月一日		「アイヌの気鳴楽器」を脱稿。[36]
昭和二十年	一九四五	八月十五日	四四歳	【終戦】
		八月二十五日	四四歳	永眠。[37]
				この年、冨山房よりクルト・ザックス *Die Musikinstrumente Indiens Und Indonesiens* の訳書『印度とインドネシアの楽器』[38] の出版を計画するも、出版直前に中止。[39]
昭和二十二年	一九四七	七月二十五日		東京藝術大学に、母太田とふやから、太田太郎の蔵書やレコードが寄贈さる。[40]
昭和二十六年	一九五一	二月二十日		没後、「アイヌの気鳴楽器」が発表さる。

主な関係団体：

大日本音楽協会附属楽器改良研究会会員[41]、日本現代作曲家連盟委員[42]・賛助員[43]、日本音楽文化協会諸委員（戦時対策特別委員会委員等[44]）、大日本吹奏楽連盟参与[45]、日本レコード音楽文化協会参与[46]、芸能文化連盟評議員[47]、大日本音楽協会（もと東京音楽協会）会員[48]・委員（図書部[49]）・評議員[50]、大日本音楽協会楽語統一調査事業委員会委員[51]、東洋音楽学会委員[52]、音楽博物館建設準備委員会常務委員[53]、音楽評論家団体結成準備会実行委員[54]、日本文化中央連盟賛助会員[55]、紀元二千六百年奉祝のための音楽関連事業に関する諸委員会委員（「企画に関する委員会」[56]、「演奏に関する委員会」[57]、皇紀二千六百年奉祝歌曲舞踊創定委員会第二部会〔洋楽〕[58]、芸能祭制定邦楽・舞踊鑑賞批判委員会等[59]）、各作曲コンクール審査員（皇紀二千六百年を奉祝し記念する「序曲」懸賞募集[60]、勤労者教育中央会主催「日本勤労の歌」作曲募集[61]、ビクター作曲募集審査顧問[62]等）、各音楽コンクール審査員（大阪毎日新聞社・東京日日新聞社主催「音楽コンクール」〔後の日本音楽コンクール〕審査委員〔理事・常任委員[63]〕、協調会・産業報国連盟・日本厚生協会・東京日日新聞社・大阪毎日新聞社共同主催「第一回全国勤労者厚生大会」音楽〔吹奏楽・合唱〕コンクール[64]）、新交響楽団（後のＮＨＫ交響楽団）改組のための委員会委員（新響改組委員会・日本交響楽団設立準備委員会等[65]）。

三、むすびに代えて

以上、太田太郎の経歴や業績を概観してむすびに代えたい。

太田太郎は、学部時代は西洋の音楽美学について研究し、東京音楽学校に就職した後も、西洋の音楽史や音楽美学を講じており、また業績目録を見ても、この時期は、ドイツで活躍した音楽家による西洋音楽に関する著作に対する翻訳が中心であることがわかる。ただ、その中でも注目すべきは、クルト・ザックスの著作の抄訳「楽器史概説」であり、早くからザックスの楽器学に関心を抱いていたことがわかる。ザックスの序文によれば、本書の目的は、先史時代からアジアの民族を歴てヨーロッパへ至る楽器の発達の過程をたどることにあるとのことで、特に、太田が翻訳をした第一章「歴史以前」では、非西洋地域の音楽が広く扱われており、中でもザックスは本章において「魔（ドイツ語zauber）」に注目し、楽器の悪魔払いや魔除けの機能について詳しく論じている。このことは、太田の後の研究（「楽器の形態的模倣呪と東亜におけ

るその管見」）にも繋がるものとして注目される。管見の及ぶ限りにおいて、これまで太田のこの翻訳の存在に言及したものは確認できないが、この翻訳は、太田の学術を考える上でも、また日本における比較音楽学の受容を考える上でも重要な業績のうちの一つであると言えよう。

東京音楽学校を退官する前年の一九三四年には、「史的に観たる楽器の意義」を発表した。この論文は西洋の楽器を扱ったものであるものの、その中にも比較音楽学的な視点を垣間見ることができる。退官後には、西洋古典音楽に対する評論や解説に積極的に取り組むようになるが、その一方でこの頃から東洋の楽器にも興味を持ち始めていたようであり、一九三五年には、満洲国や北平において楽器を調査している。また、それと前後して日本各地の楽器についても調査していたようである。

一九三六年に、日本初の音楽学会である東洋音楽学会が設立されると同時にそれに参加し、東洋音楽学会初の学会誌『東洋音楽研究』第一輯（一九三六年）に「楽器の形態的模倣呪と東亜におけるその管見」を発表した。この論文は、上述のザックス「楽器史概説」の「zauber（「呪」とも訳すことができる）」に触発されたものと考えられ、また、ザックスの複数の著作（「楽器史概説」『楽器の精神と生成』『印度とインドネシアの音楽』『比較音楽学』）を参考にして書かれている。さらに興味深いことには、満洲や北平での調査の成果も取り込まれている。この時点における専攻分野については、みずから「楽器の文化的実証的研究」としている。

また、一九三六年から一九三七年にかけて「西洋音楽史の概要」を連載するが、太田自身、この連載は西洋音楽を「文化と関聯させた小さな簡潔なスケッチ」であるとし、特に「音楽の起源、自然民族の音楽」や「古代文化民族の音楽」の章において、ザックスをはじめとした比較音楽学の著作を参考にしており、とりわけ「音楽の起源、自然民族の音楽」では「音楽と魔力」という節が設けられており、やはりザックスの影響が見て取れる。また、「比較音楽学」について定義を行っている点も注目される。(66)

一九三七年には、欧米の音楽公共施設の視察に出発する。その視察内容は「欧米音楽行脚の覚書から」（一九三八年）に述べられているが、その上篇に、視察での仕事が多岐にわたるため「その焦点は楽器学とその歴史就中日本のそれに置き、その欧米に於ける素材や、研究、仕様並びに世界の音楽との関聯といふ点に集中してみた」と記されており、視察が楽器学とその歴史、特に日本のそれに焦点を置いたものであったことがわかる。また、欧米各地でクルト・ザックス（Curt Sachs, 一八八一―一九五九）、アンドレ・シェフネル（シェフナー）（André Schaeffner, 一八九五―一九八〇）、トビアス・ノルリンド（Tobias Norlind, 一八七九―一九四七）をはじめ、楽器学の大家と直接面会しており、特に、ザックスとの会見が彼が与えた影響は計り知れないものがある（このことについては別稿で述べることにする）。また、この欧米視察の成果は後の音楽博物館建

設運動に大きく役立てられることになった。[67] おそらく、欧米での視察を経て、日本や東洋の楽器に対する研究意欲が相当高まったのではないかと想像されるが、先の「欧米音楽行脚の覚書から」には、一九三八年三月にAK洋楽課長に就任して以来、多忙のため、原稿さえ落ち着いて書けない状況であることが吐露されている。これ以降、欧米視察での見聞を記した記事を多数、各雑誌や新聞で発表するが、その一方、論文はしばらく執筆されなくなる。

一九三八年の日本放送協会洋楽課長への就任から、一九四一年の音楽部長への就任を経て、一九四二年の退職に至るまで、折しもその時期は、日中戦争から太平洋戦争に至る時期とも重なり、それに伴い、公共放送の要職者として様々な団体の役職につき、国策としての音楽に関する仕事に追われるようになったようである。例えば、紀元二千六百年の記念事業の準備のために奔走し、また、音楽宣撫工作の視察のため中国へ渡ったりしている。

一九四二年には病気を理由に日本放送協会を休職し、またその半年後、退職をするが、この頃、体調が優れなかった一方で、研究意欲は旺盛であったのではないかと想像される。一九四二年には「ザックス博士の業蹟」を発表したが、おそらくこの頃には『印度とインドネシアの楽器』の翻訳作業をすでに進めていたのではないかと思われる。そして、一九四三年には「マイオン四綱楽器分類法の源流として観たる印度の楽器分類法」を発表し、それが収められた論文集の執筆者略歴には、自身の専門について「比較楽器学を専攻、特に日本を中心とした楽器の組織学的研究」と記されており、「比較音楽学」といい、「組織学的研究」といい、ザックスからの影響が明確に看取できる（その具体的内容については、稿を改めて述べることとする）。それと同時に、略歴には、代表作としてザックス著『印度とインドネシアの楽器』の訳補が挙げられており、この頃には訳稿が完成に近い形になっていたと想像される。その後、一九四四年には、北海道に行き、アイヌ楽器の調査を行ったが、この成果は生前には日の目を見ず、戦後になりようやく発表された。

以上のように、彼の専門が音楽史・音楽美学から楽器学へと変化してきたことがわかるが、各年度の大日本音楽協会編『音楽年鑑』（東京：共益商社書店）所収の「音楽人名録」にもその変遷が現れている。すなわち、太田太郎の名は東京音楽学校教授となった昭和八（一九三三）年に現れるが、そこから昭和十四（一九三九）年までは「音楽史・音楽美学」と記されていたのが、昭和十五（一九四〇）年以降は「音楽史・楽器学」となっており、さらには、一九三八年発行の平凡社編『新撰大人名辞典 第七巻』（東京：平凡社）一〇四頁の「太田太郎」の項目には「楽器史研究家」と見え、これらの記載は、本人の申請に拠るものか、あるいは一般の認識に拠るものか詳らかではないが、おそらく遅くとも

「楽器の形態的模倣呪と東亜におけるその管見」を執筆した一九三六年頃までには、楽器学を専門とするという意識が芽生え、一九三七年から一九三八年にかけての欧米視察を経てその意識がますます強くなったものと思われる。

本稿では、楽器学を中心に彼の学問の変遷を概観したが、次稿では、太田がクルト・ザックスから受けた影響や、太田太郎の楽器学が目指したもの等について考えてみたい。

注

（1）いつ、誰によって改められたかは不明であるが、少なくとも一九五〇年代には、岸辺成雄氏が様々な著作の中で「体鳴」「弦鳴」「気鳴」と並んで「膜鳴」の語を用いている（例えば、ザックス著、野村良雄訳『比較音楽学』〔東京：全音楽譜出版社、一九五三年〕の岸辺成雄「解説――読者への手引き」一六一頁、演劇博物館編『芸能辞典』〔東京：東京堂、一九五三年〕、一五〇頁の項目「楽器」〔岸辺氏担当〕等多数）。あるいは岸辺氏による改名か。

（2）太田太郎「マイヨン四綱楽器分類法の源流として観たる印度の楽器分類法」一四一頁（以下、太田太郎の業績の書誌事項等については、後掲の「太田太郎業績目録（稿）」に譲り、省略する）に「「体鳴、皮鳴、絃鳴、気鳴―楽器」といふ術語は、私の命名である」とある。

（3）荻野綾子は、戦前に活躍した著名な声楽家で、日本のみならずパリでも活躍し、日本の作曲家による作品やフランス歌曲に積極的に取り組んだ。香月隆『評伝 まぼろしの歌姫 荻野綾子（全）』（第二版。福岡：荻野綾子顕彰会、二〇二二年。以下、『評伝 荻野綾子』と略称す）に詳しい。また、山田耕筰の「からたちの花」は、荻野綾子に捧げられたという（同書一〇五頁を参照）。

（4）井上裕太「太田太郎の欧米における音楽公共施設視察と音楽研究所の設置」（『國學院大學博物館学紀要』第三十九輯、二〇一五年三月）、同『日本音楽博物館論』（東京：同成社、二〇二一年）第二章「戦前期における音楽博物館思想」第二節「太田太郎の西洋における音楽調査」を参照。

（5）比較音楽学の専攻者・紹介者として言及したものに、岸辺成雄「比較音楽学の業績と方法」（東京大学教養学部比較文学比較文化研究室編『比較文化研究』第一輯、一九六〇年一月）一九頁、野村良雄訳『比較音楽学』（前掲）所収岸辺成雄「解説――読者への手引き」一五七頁等がある。

（6）現在、東京藝術大学附属図書館には、太田太郎旧蔵資料（図書・楽譜・レコード）を収めた「太田文庫」がある。柿木吾郎「比較音楽史の業績と方法」（『宮崎大学学芸学部紀要 芸能』第十六号、一九六三年）「一、海外における比較音楽学の成果とその輸入」二頁や、大塚明（司会）、柿木吾郎、角倉一郎、佐野光司「座談会 日本の音楽学を問いなおす（上）」（『音楽芸術』九月号、第三十一巻第十号、一九七三年九月）五七頁における柿木氏の発言等には、「太田文庫」が基本文献の揃った本格的で美事なコレクションであるとの評価が見える。

（7）筆者は、かつて日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究（B）「隋唐燕楽歌辞の文学的・音楽学的アプローチによる双方向的研究」（研究課題／領域番号：15H03197、研究代表者：関西大学、長谷部剛。二〇一五―二〇一八年度）に研究分担者として参加し、その一環として、東洋音楽学者である林謙三（一八九九―一九七六）旧蔵の東アジア音楽関係資料の整理・研究を行ったが、その過程において、長谷部剛氏とともに、太田太郎に関する資料群を発見したのである。特に、『印度とインドネシアの楽器』は、太田太郎「マイヨン四綱楽器分類法の源流として観たる印度の楽器分類法」が掲載された『田辺先生還暦記念 東亜音楽論叢』（一九四三年）の「執筆者略歴」にも代表作として挙げられており、その名は知られていたものの、

出版されなかったために、実体が不明であったものである。太田太郎は、四十四歳の若さで早逝するが、これらの資料は恐らく、太田の死後か生前に何らかの形で林謙三に託されたものと考えられる。現在、筆者は、二〇一八年度から二〇二四年度まで、日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究（C）「林謙三による東アジア楽器学の基礎的研究」（研究課題／領域番号：18K00156、研究代表者：山寺三知）を遂行しており、その中で、林謙三旧蔵の楽器学関係の資料を整理し、特に林謙三の未発表原稿の翻刻を発表しているところである。二〇一九年度には、林謙三の楽器学に関連する資料として、『印度とインドネシアの楽器』の翻字の基礎作業を行ったが、様々な課題があり、公表には至っていない。今後、機会を見つけて何らかの形で公刊したいと考えている。ノート類については、まだ整理分析の段階に至っていないため、本稿では、一部を除き、刊行物を通じて知り得る情報に基づいて執筆した。これらノート類についても公開できる方法を模索している。

（8）『東洋音楽研究』第一輯は、『月刊楽譜』第二十五巻十月号（一九三六年十月）の誌面を借りて、特集「創刊廿五周年記念特別論文集、東洋音楽学会第一回研究論攷」として掲載された。後に『東洋音楽研究』は第四十三号（一九七八年）までが複刻されたが（東京：第一書房、一九八五年）、それに収載されている第一輯は、『月刊楽譜』所収とは頁数が若干異なり、「同人紹介」における太田の記事は一一一頁に掲載されている。

（9）「太田太郎業績目録（稿）」の作成にあたっては、索引（『戦前期レコード音楽雑誌記事索引』『明治・大正・昭和前期雑誌記事索引集成 人文科学編』『昭和初期の音楽評論雑誌 音楽批評の萌芽・記事索引』）やデータベース（「国立国会図書館サーチ」「CiNii」「雑誌記事索引集成データベース（ざっさくプラス）」）等も使用したが、戦前は音楽関係の雑誌が多数発行されていたにもかかわらず、現在網羅的には整理されておらず、上述の索引やデータベースに未収録の雑誌記事も多数存在し、これらのツールを用いて検索できるのは一部であるため、それ以外のものについては、いわば手探りで渉猟収集した。したがって、遺漏も多数あると思われるが、その一方で、これまで知られていなかった太田の業績も多数発掘できたものと考えている。なお、業績目録は、太田太郎の業績の変遷が明らかになるよう、著書・雑誌記事・講演等を区別せず年代順に並べてある。

（10）父母の姓名、住所等については、猪野三郎編『現代人事調査録』（東京：帝国秘密探偵社・帝国人事通信社、一九二五年）七二頁等に拠る。母親の名については、『評伝 荻野綾子』（二六六頁）と、『東京朝日新聞』一九四五年九月五日朝刊（二面）に掲載された太田太郎の死亡広告では、それぞれ「とや」「トヤ」とし、『現代人事調査録』（七二頁）と東京藝術大学図書館における「太田文庫」の受け入れ台帳には、それぞれ「トフヤ」「とふや」と表記されている。また、母親の生年については、資料により記載が異なる。例えば、婦女通信社編『大日本婦人録』（東京：婦女通信社、一九〇八年）二三四頁では、明治七年四月二十六日とし、『現代人事調査録』（前掲）七二頁では明治十七年四月とし、人事興信所編『人事興信録 第十四版 上』（東京：人事興信所、一九四三年）オ之部一七八頁では明治十五年四月とする。なお、太田為三郎は、帝国図書館司書官、台湾総督府図書館長、日本図書館協会会長、東京商科大学教授を歴任、編著書に、太田為三郎編『日本随筆索引』（東京：東陽堂、一九〇一年。岩波書店増訂版、一九二六年）、同編『日本随筆索引 続』（東京：岩波書店、一九三二年）、同編『帝国地名辞典』（東京：三省堂書店、一九一二年）、同編『内外主要図書館要覧』（東京：日本図書館協会、一九三〇年）、同述『図書整理法』（千葉：千葉県図書館、一九三一年）、同講『和漢図書法目録』（東京：芸艸会、一九三二年）等がある。為三郎の伝記については、波多野賢一「太田為三郎先生伝――協会創立前後並に帝国図書館奉職当時の」（『図書館雑誌』第三十六年第三号、一九四二年三月、一九三―一九八頁）、石川洋「中味の充実に努力 太田為三郎」（石井敦編『図書館を育てた人々 日本編Ⅰ』東京：日本図書館協会、一九八三年、四九―五七頁）等に詳しい。

（11）各指導者の肩書き・専門分野については、各事典・人名録等を参考にして筆者が補ったが、煩瑣になるため典拠は省略した。また、肩書きは、太

田を指導したと思われる時期のものを挙げた。

(12) 太田太郎が阿部次郎へ送った書簡十点（昭和三年から十七年まで）が、東北大学阿部次郎記念館に保管されている。また、『阿部次郎全集 第十四巻 日記（上）』（東京：角川書店、一九六二年）、『同 第十五巻 日記（下）』（東京：角川書店、一九六三年）には、太田太郎の名がいくたびか登場する。

(13) 以下、東京音楽学校と第四臨時教員養成所における教学内容・校務分掌について括弧内に示したが、それらは、各在職年の東京音楽学校編『第四臨時教員養成所一覧』、同『東京音楽学校一覧』を参照した。

(14) ただし、太田在職中と思われる各年度の『東京高等学校一覧』における「現職員」の項目を確認しても、太田太郎の名は見出せない。

(15) 太田は、ザックスの著書 *Die Musikinstrumente* を抄訳する際、「楽器史概説」と題したが、「ザックス博士の業蹟」においては、その書名を「楽器概説」「楽器史」等と訳しており、一定していない。いずれにしても、このザックスの著作は、一九四〇年に出版の *The history of musical instruments.* (New York: W.W. Norton, 1940. 日本語訳：柿木吾郎訳『楽器の歴史 上下』〔東京：全音楽譜出版社、上：一九六五年、下：一九六六年〕）とは異なるものである。

(16) 田辺尚雄「音楽博物館の建設運動」（『月刊楽譜』第二十八巻五月号、一九三九年五月。『東京日日新聞』一九三九年四月五日より転載）五七頁に「……昭和八年十一月に白木屋で再び同様の音楽展覧会が催された。……白木屋の時は遠藤宏氏の監督の下に、東洋方面には私が助力し、西洋方面には太田太郎氏が助力された」とある。また、田辺尚雄「音楽博物館建設の急務」（『教育音楽』第十七巻第五号、五月号、一九三九年五月）三頁に「昭和八年十一月十一日から同十九日まで、東京日本橋の白木屋で再び此の種の音楽博覧会が開催された。……又た東京音楽学校から多くの珍らしい材料を出品されたので、其の方の監督は太田太郎氏が当つて居られた」とある。この音楽展覧会の詳細については、『音楽展覧会出品目録』（出版者不明、一九三三年。主催：日本教育音楽協会、後援：文部省東京府東京市、会期：昭和八年十一月十一日～十九日、会場：白木屋）を参照。

(17) 『官報』昭和九年七月二十八日第二二七二号、七一七頁に拠る。なお、国立公文書館に辞令が残されている（請求番号：任B01915100「東京音楽学校教授太田太郎免官ノ件」）。

(18) 『東京朝日新聞』一九三四年八月二十二日朝刊、一一面に掲載の記事「教壇に実を結んだ恋 冷い上野のご法度 ハープの荻野さんと音楽史の太田君 退職して愛の巣へ」に拠る。記事によれば、挙式は同年秋の予定であるとのこと。また、『月刊楽譜』第二十三巻十一月号（一九三四年十一月）一二五頁に掲載された、九月十六日から十月十五日までの音楽家の動向を記した「楽人消息」には「荻野綾子氏 太田太郎氏と結婚、本郷区駒込曙町二八へ新居を構フ」と見える。

(19) 太田太郎「中国劇音楽研究所その他――北平雑感」に拠る。この文章の冒頭に拠ると、太田は、この頃までにすでに日本各地の楽器調査を行っていたようである。

(20) 東洋音楽学会成立の時期については、『東洋音楽研究』第一巻第一号（一九三七年十一月）九三頁の「彙報」に掲載の記事「本会設立以来の概況」に拠る。ただし、『月刊楽譜』第二十五巻八月号（一九三六年八月）七七頁に掲載の記事「「東洋音楽学会」結成さる」に拠ると、発起会は「七月十八日（土）午後六時より」行われたとあり、こちらの記事では曜日も記され、より具体的な記録となっており、結成は「十八日」であった可能性も考えられる。

(21) 専門分野は、「同人紹介」（前掲）に拠る。

(22) 太田太郎「欧米音楽行脚の覚書から（上）・（下）」に拠る。
(23) 太田太郎「一九三七年度国際児童音楽協会パリ会議の概況（一）～（三）」に拠る。ただし、会議の名称については、太田「最近の欧米における音楽教育の趨勢」「欧米音楽行脚の覚書から（上）」等では、「国際音楽教育会議」とする。
(24) 太田太郎「ザックス博士との会見記」に拠る。
(25) 「ザックス博士との会見記」に拠る。ニューヨークでの面会の時期については、「ザックス博士との会見記」四二頁には「私は本年一月欧洲を去つてアメリカに渡つたが……」とあり、一見「一月」に再会したように思えるが、「欧米音楽行脚の覚書から（上）」四二頁に拠ると、「今年の一月末ハンブルクを船出して二月初米国へ渡り」とあり、アメリカに到着したのは二月であることがわかる。
(26) 『讀賣新聞』一九三八年三月五日（全国版）第二夕刊、二面に掲載の記事「戦勝春の母国へ使節船帰る 日本の真意知らせて 力強い〝防共行脚〟の土産話」に拠る。
(27) 『讀賣新聞』一九三八年三月二十五日（全国版）第二夕刊、二面に掲載の記事「ＡＫの洋楽課長 太田太郎氏に決る」、日本放送協会編『ラヂオ年鑑 昭和十五年』（東京：日本放送出版協会、一九四〇年）「日本放送協会昭和十三年誌（自十三年一月至十四年三月）」「（八）職員異動（抄）」三六三頁に拠る。「初代」としたのは、「欧米音楽行脚の覚書から（上）」四三頁に「ＡＫ洋楽課長といふ初代且つ重任の就任を諾した為に……」とあり、また「洋楽放送の明日を語る――太田ＡＫ新洋楽課長に訊く」に見える、聞き手である吉本明光氏の言葉に、「多年懸案であつたＡＫ洋楽課長――今まで職制だけあつて人が居なかつた洋楽課長の初代の椅子にお座りになつた」（七四頁）とあり、さらに、太田自身の言葉として「久保田（万太郎）さんが演芸兼音楽課長。そこで私ですが出て見てよく聴いて見ると洋楽課長なんです」（八〇頁）とあるからである。ただし、『ラヂオ年鑑 昭和十五年』三六三頁に、太田が洋楽課長に就いた同日、すなわち、昭和十三年（一九三八）三月二十四日付の免職人事として、「業務局文芸部洋楽課長兼務 久保田万太郎」（傍点は筆者）とあり、久保田は音楽課長ではなく、洋楽課長を免職されており、さらには、日本放送協会編『日本放送協会史』（東京：日本放送協会、一九三九年）八八頁に、昭和十二年（一九三七）五月二十六日付の業務組織の改正として「業務局文芸部音楽課を洋楽課に改む」と見え、これらの資料から、洋楽課が設けられてから太田がその課長に就任するまでの約十ヶ月の間、制度上は、久保田がその任を担っていたと考えられるが、太田就任時に、なぜ久保田が洋楽課長ではなく音楽課長と認識されていたのか、その詳細については不明。
(28) 田辺尚雄「音楽博物館建設の趣旨」（『自然科学と博物館』第十巻一一七号、九月号、一九三九年九月）三頁に拠る。
(29) 林謙三ほか編「東亜音楽文化展覧会記」（『自然科学と博物館』第十巻第一一七号、九月号、一九三九年九月）に拠る。
(30) 林謙三ほか編『東亜音楽文化展覧会記事』（『自然科学と博物館』昭和十四年九月号抜刷）一六頁（ただし頁番号は記載されていない）の「備考」に拠る。なお、この「備考」は、『自然科学と博物館』（第十巻第一一七号、九月号、一九三九年九月）所収「東亜音楽文化展覧会記」には見えず、抜刷作成の際に追加されたものと思われる。また、抜刷では、表紙のタイトルの末尾に「事」が追加されている。ただし、本文中のタイトルは「東亜音楽文化展覧会記」のままである。
(31) 『朝日新聞』一九四一年一月十九日東京夕刊、二面に掲載の記事「ＡＫの機構改革 戦時下電波の飛躍へ」に拠る。同記事に拠ると、日本放送協会において、従来、各部にあった「課」の制度を全廃し、文芸部を二分して演芸部と音楽部としたとのこと。日本放送協会編『ＮＨＫ年鑑 昭和十七年版』（東京：日本放送協会、一九四一年）「日本放送協会事務規程（抄）」四五五頁に見える「第二章 業務組織」十四条ノ二に「業務局音楽部ニ於テハ

司掌地域内ノ洋楽放送ニ関スル事務ヲ掌ル」とあり、音楽部が扱った音楽は洋楽であったことがわかる（同規程の十四条「演芸部」の箇所には「和楽放送」が含まれている）。なお、『評伝　荻野綾子』三一三頁に拠ると、太田太郎は、このころから肺結核になったと言う（典拠は不明）。

(32) 加田愛咲「劈頭半年のこと――戦時下の音楽放送雑感」（『音楽之友』第二巻第六号、六月号、一九四二年六月）七〇頁に「音楽部長太田太郎氏が、病気のため休職に……」とあり、その注八（七一頁）に「二月十日付で、六ヶ月間休職の発令があつた」とある。

(33) 『音楽之友』（第二巻第九号、九月号、一九四二年九月）一二七頁に掲載の「消息」欄に「太田太郎氏　日本放送協会を辞す」とある。なお、千葉利江「楽界人物素描　有坂愛彦」（『音楽之友』第二巻第九号、九月号、一九四二年九月）八六頁には「……去る七月二十九日、休職中だつた音楽部長太田太郎が、きつぱりと退職してから……」とし、日付を明記する。

(34) 専門分野は『田辺先生還暦記念　東亜音楽論叢』の「執筆者略歴」に拠る。

(35) 林謙三旧蔵の太田太郎調査ノート「アイヌ楽器調査記録」に拠る。

(36) 『東洋音楽研究』第九号（一九五一年二月）所収、太田太郎「アイヌの気鳴楽器」六九頁に拠る。

(37) 『朝日新聞』一九四五年九月五日（東京）朝刊、二面の死亡広告に拠る。

(38) 原著の書誌は以下のとおり。Curt Sachs, *Die Musikinstrumente Indiens Und Indonesiens: Zugleich Eine Einführung in Die Instrumentenkunde*, 2. Aufl., Handbücher der Staatlichen Museen zu Berlin (Berlin: Vereinigung Wissenschaftlicher Verleger Walter de Gruyter, 1923).

(39) 『新潮』第四十二年第二号、二月号（東京：新潮社、一九四五年二月）の見返し目次の下部に、冨山房の近刊書案内の広告があり、そこに太田太郎・橋本清司共訳『楽式論』（「太田太郎業績目録（稿）」を参照）とともに、「太田太郎訳編（ママ）『印度とインドネシヤ（ママ）の楽器』」が見え、そこには「A5判　三〇〇頁」「予価　一〇・〇〇」と記されている。ここから一九四五年二月の時点において出版間近であったことが伺える。林謙三旧蔵資料から見つかった『印度とインドネシアの楽器』の校正紙を見ると、その大きさは確かにA5判であり、目次や訳補者緒言、太田による書き下ろし「ザックス楽器学の概要」等を除いた、本文は二九九頁である。なお、同じ頃、林謙三の『東亜楽器考』も同じく冨山房から出版予定であったが、戦後の出版界の不況により中止されてしまった。本書の場合は、不況とともに、太田が亡くなったことも関係するものと思われる。

(40) 東京藝術大学附属図書館所蔵の「太田文庫」の受け入れ台帳に「昭和二十二年七月二十五日故太田太郎の母太田とふや氏より寄贈を受ける」と見える。

(41) 「同人紹介」（前掲）に拠る。「同人紹介」は「ＫＯＫ楽器改良研究会員」とするが、「ＫＯＫ」とは、この研究会の会長である大倉喜七郎男爵（一八八二―一九六三）が主宰する音楽事務所のこと。社団法人大日本音楽協会編『音楽年鑑　昭和十二年版』（東京：共益商社書店、一九三七年）「音楽関係団体」三九二頁に拠ると、楽器改良研究会の所在地はＫＯＫ事務所となっている。なお、「ＫＯＫ」が何の略称であるのか定かではないが、楽器改良研究会の幹事長を務めていた伊庭孝（一八八七―一九三七）「大倉男のＫＯＫ事務所の事業」（『月刊楽譜』第二十四巻十月号、一九三五年十月）一一七頁に拠ると、「Kihichiro Okura Kihichiro」の略かと思われるとのことである。

(42) 『月刊楽譜』第二十五巻十二月号（一九三六年十二月）一四〇頁「楽界ニュース」に掲載の記事「日本現代作曲家連盟」に拠る。

(43) 「同人紹介」（前掲）に拠る。

(44) 『音楽公論』第二巻第二号（一九四二年二月）四五頁に掲載の記事「音楽文化協会で戦時対策特別委員会設置」に拠る。

(45) 協同出版社編『現代出版文化人総覧　昭和十八年版』（東京：協同出版社、一九四三年）「現代執筆家一覧」四一一頁に拠る。
(46) 『現代出版文化人総覧　昭和十八年版』（前掲）四一一頁に拠る。
(47) 『現代出版文化人総覧　昭和十八年版』（前掲）四一一頁に拠る。
(48) 東京音楽協会編『音楽年鑑　昭和十一年版』（東京：音楽世界社、一九三六年）「音楽関係人名録　東京の部」二一頁、大日本音楽協会編『音楽年鑑　昭和十二年版』（東京：共益商社書店、一九三七年）「音楽人名録　洋楽之部」一六七頁等に拠る。
(49) 『月刊楽譜』第二十九巻九月号（一九四〇年九月）二三頁に掲載の記事「新機構の音楽協会役員決定」に拠る。
(50) 『月刊楽譜』第二十八巻三月号（一九三九年三月）一〇一頁に掲載の記事「大日本音楽協会新評議員決定」に拠る。
(51) 社団法人日本放送協会編『社団法人日本放送協会採定　標準洋楽語彙』（東京：共益商社書店、一九三八年）「本書の編纂について」五頁に拠る。
(52) 『東洋音楽研究』第一巻第一号（一九三七年十一月）一頁に掲載の「発刊の辞」に拠る。
(53) 田辺尚雄「音楽博物館建設の趣旨」（前掲）三頁に拠る。
(54) 『月刊楽譜』第三十巻一月号（一九四一年一月）七一頁に掲載の記事「音楽評論家団体結成準備会」に拠る。
(55) 日本文化中央連盟『文化日本』第六巻第十二号（一九四二年十二月）「連盟だより」四九頁に掲載の記事「賛助会員の推薦」に拠る。
(56) 『紀元二千六百年祝典記録　第十一冊』（東京：内閣、一九四〇年）七四二頁に拠る。
(57) 『紀元二千六百年祝典記録　第十一冊』（前掲）七四三頁に拠る。
(58) 『文化日本』第三巻第二号（一九三九年二月）一二頁に掲載の記事「皇紀二千六百年奉祝歌曲・舞踊　創定準備すゝむ」、『文化日本』第三巻第四号（一九三九年四月）一一頁に掲載の記事「皇紀二千六百年奉祝歌曲及舞踊　着々具体化に進む」等に拠る。
(59) 『文化日本』第四巻第六号（一九四〇年六月）一〇七頁に掲載の記事「芸能祭制定邦楽・舞踊鑑賞批判委員会成立す」に拠る。
(60) 『文化日本』第三巻第四号（一九三九年四月）七頁に掲載の記事「皇紀二千六百年を奉祝し記念する「序曲」懸賞募集」に拠る。
(61) 『東京朝日新聞』一九四〇年七月二十六日朝刊、七面に掲載の記事「「日本勤労の歌」当選作曲きまる」に拠る。
(62) 清瀬保二「ビクターの作曲募集に就て」（『音楽公論』第二巻第二号、一九四二年二月）八九頁に拠る。
(63) 大阪毎日新聞社・東京日日新聞社共編『毎日年鑑　昭和十四年版』（大阪：大阪毎日新聞社、東京：東京日日新聞社、一九三八年十月）四二七頁に掲載の記事「本社主催の音楽コンクール」、大日本音楽協会編『音楽年鑑　昭和十六年版』（東京：共益商社書店、一九四一年）二二頁に掲載の記事「音楽の競技」、同編『音楽年鑑　昭和十七年版』（東京：共益商社書店、一九四二年）三一頁に掲載の記事「音楽の競技」等に拠る。
(64) 管楽研究会編『吹奏楽年鑑　紀元二六〇一年版』（東京：管楽研究会、一九四一年）一九頁に掲載の記事「昭和十五年度吹奏楽記録」に拠る。
(65) ＮＨＫ交響楽団編「Ｎ響史　その四十年の歩み　Ｘ（未定稿）」（『フィルハーモニー』第三十七巻第五号、五月号、一九六五年五月）の第五章「太平洋戦争から敗戦へ」第二節「財団法人日本交響団（ママ）誕生」四六―四七頁に拠る。
(66) 太田太郎「西洋音楽史の概要（2）」一〇二―一〇三頁に「比較音楽学とは、凡ゆる発展段階の文化に於ける西洋以外の音楽を研究の主要対象とし、之を実証的に彼此比較対照し、発展段階を規定し、延いては西洋音楽の発達に之を聯関せしめてその径路位置を明かにし、以て最根本的な基礎附をなし再批判をなさうとする科学である」とある。

(67) 田辺尚雄「音楽博物館建設の急務」（前掲）二頁に「一昨年、同学会の中堅をなす所の太田太郎氏は約一ヶ年間欧米各国の完備せる音楽博物館の施設を調査する為めに欧米を旅行して帰朝され、斯の有名なクルト、ザックスの監督するニューヨークの音楽博物館や、又たベルリンのドイツ博物館などの完備せる施設に就て詳しい報告をされたのであつた。此のことは今回の音楽博物館建設に当つて極めて重要なる資料となることは申すまでもないことである」とある。

[付記]

本稿は日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究（C）「林謙三による東アジア楽器学の基礎的研究」（課題番号：18K00156、研究代表者：山寺三知、研究期間：二〇一八―二〇二四年度）、及び同基盤研究（B）「東アジア古代歌謡の文学的・音楽学的アプローチによる双方的研究」（課題番号：21H00509、研究代表者：長谷部剛、研究期間：二〇二一―二〇二四年度）による研究成果の一部である。

[謝辞]

資料の閲覧をご許可下さいました東京藝術大学附属図書館専門員大田原章雄様並びに同館職員の皆様、林謙三旧蔵書の調査・閲覧をご許可下さいました長屋糺様（林謙三氏ご子息）、調査にご協力下さいました長谷部剛氏（関西大学教授）、資料収集にご協力下さいました國學院大學北海道短期大学部図書館事務室の西村千夏様・本間千亜紀様に心より感謝申し上げます。

太田太郎業績目録（稿）

著訳者・講演者	記事名・書名・演題等	雑誌名・書誌・講演場所等	ページ数	事跡
フェルッチオ・ブゾーニ著、太田太郎訳	覚書と日記から	『音楽研究』（音楽研究社）第1巻第5号（1923年6月発行）	p.35-45	1923年： 東京帝国大学選科在籍。
パウル・ベッカー著、太田太郎訳	『西洋音楽史』（音楽教育叢書 第9編）	東京：京文社、1929年10月	8, 3, 379, 20p	1929年9月： 高野山大学教授に任ぜらる。
ブゾーニ著、太田太郎訳	ブゾーニ著「音楽の統一」中の2篇――バッハ版刊行に際しての辞、イングリッシュホルンかアルト・オーボエか	『新響』（シンキョウ社）第56号（1931年6月発行）	p.1-2	
ブゾーニ著、太田太郎訳	ブゾーニ著「音楽の統一」（245-6頁）バッハのトッカータへの緒言	『新響』（シンキョウ社）第57号（1931年7月発行）	p.1-2	
ブゾーニ著、太田太郎訳	ブゾーニ著「音楽の統一」（222-223頁）――チューリッヒのプログラムから 1、「ベートーヴェン」	『新響』（シンキョウ社）第58号（1931年10月発行）	p.2	1931年12月： 東京音楽学校助教授に任ぜらる。
太田太郎	はしがき	『音楽』（東京音楽学校学友会）第13号（1932年3月発行）	p.1-4	1932年3月： 東京音楽学校教授に任ぜらる。
フーゴー・リーマン著、太田太郎、永谷義輝、井上信子、佐藤由紀、山田ちよ、中村ひさ子、小田雪江、柳原豊彦、増富秀、片山ゆき子、内野照子訳	バッハ作「平均律ピアノ曲」解剖 序説 第一巻, 3, 4, 7, 10, 12, 13, 17, 20, 21, 22, 23, 24	『音楽』（東京音楽学校学友会）第13号（1932年3月発行）※目次の表記は「「バッハ平均律ピアノ曲集」解剖」。	横組p.1-84 （太田分：序説p.3-10）	
クルト・ザックス著、太田太郎訳	楽器史概説	『教育音楽』（日本教育音楽協会）第10巻第7号（1932年7月発行）※翻訳範囲は、第1章「歴史以前」。	p.44-48	
クラウス・ブリングスハイム著、太田太郎訳	学校歌劇「ヤーザーゲル」上演に際して	『音楽世界』第4巻第8号（1932年8月発行）	p.82-84	
クルト・ザックス著、太田太郎訳	楽器史概説（承前）	『教育音楽』（日本教育音楽協会）第10巻第9号（1932年9月発行）※翻訳範囲は、第1章「歴史以前」。	p.51-54	
クルト・ザックス著、太田太郎訳	楽器史概説（承前）	『教育音楽』（日本教育音楽協会）第10巻第10号（1932年10月発行）※翻訳範囲は、第1章「歴史以前」。	p.48-52	
クルト・ザックス著、太田太郎訳	楽器史概説（承前）	『教育音楽』（日本教育音楽協会）第11巻第1号（1933年1月発行）※翻訳範囲は、第1章「歴史以前」。	p.51-55	1933年
太田太郎	ヴァイオリン協奏曲 ホ長調 バッハ作（第124回定期公演曲目解説）	『音楽雑誌フィルハーモニー』第7巻第4号（1933年4月発行）	p.27	
アードルフ・ワイスマン著、太田太郎訳	ブラームスよりレーゲルまで（1）――「世界危機に於ける音楽」より	『音楽評論』（音楽評論社）第2号（1933年5月発行）	p.22-25	
クルト・ザックス著、太田太郎訳	楽器史概説（承前）	『教育音楽』（日本教育音楽協会）第11巻第5号（1933年5月発行）※翻訳範囲は、第1章「歴史以前」。	p.49-54	
アードルフ・ワイスマン著、太田太郎訳	ブラームスよりレーゲルまで（2）――「世界危機に於ける音楽」より	『音楽評論』（音楽評論社）第3号（1933年6月発行）	p.18-24	1933年7月： 東京音楽学校を退官。
クルト・ザックス著、太田太郎訳	楽器史概説（承前）	『教育音楽』（日本教育音楽協会）第11巻第12号（1933年12月発行）※翻訳範囲は、第2章「歴史」第1節「中世」。	p.50-55	
太田太郎	史的に観たる楽器の意義	『教育研究』（初等教育研究会）第412号（1933年12月発行）	p.103-112	
太田太郎	史的に観たる楽器の意義	『音楽』（東京音楽学校学友会）第14号（1934年3月発行）※『教育研究』第412号（1933年12月発行）掲載の再録。	p.56-64	1934年
フーゴー・リーマン著、太田太郎、黒沢愛子、横山田鶴、遠見豊子、池田文子、今井治郎訳	バッハ作「平均律ピアノ曲」解剖 序説 第一巻, 1, 2, 9, 18, 19	『音楽』（東京音楽学校学友会）第14号（1934年3月発行）※目次の表記は「バッハ平均律ピアノ曲集解剖」。	横組p.1-37 （太田分：序説p.3-10）	
ヴッヘルプヘニッヒ、マリア・トル、太田太郎共著	『アリア曲集Ⅰ』（音楽演奏法と解釈講座 声楽篇）	東京：竜吟社、1934年7月	263p	1934年8月： 結婚を発表。
太田太郎	交響詩曲「死と浄化」解説	『レコード音楽』第9巻第2号（1935年2月発行）	p.17-19	1935年： この年、AK洋楽曲選定委員となる。

著訳者・講演者	記事名・書名・演題等	雑誌名・書誌・講演場所等	ページ数	事跡
太田太郎	乙骨先生の遺書「音楽史」	『音楽』（東京音楽学校学友会）第15号（1935年3月発行）	p.56-59	
太田太郎講演・解説	バッハ生誕250周年に際して（Ⅰ）講演「バッハの人格と芸術」、（Ⅱ）「バッハの音楽（レコード）」（1）器楽曲：（イ）ブランデンブルグ協奏曲第2番ヘ長調、パリ音楽院合奏団、指揮アルフレッド・コルトー、（ロ）前奏曲と遁走曲ハ長調（「平均率ピアノ曲集」第1巻第1）、クラヴィコード演奏アーノルド・ドルメッチ、（2）声楽曲：「マタイ伝に拠る受難楽」より、独唱者及び聖バルトルマイ教会聖歌隊、指揮ダヴィット・ウィリアムス	社団法人日本放送協会東京中央放送局ラジオ第2放送「日曜特輯講座」1935年3月21日19時30分～放送 ※終了時間不明。		
太田太郎	史的に観たる楽器の意義（1）	『学校音楽』（学校教育研究会）第3巻第4号（1935年4月発行）※『教育研究』第412号（1933年12月発行）掲載の再録。	p.7-10	
太田太郎	史的に観たる楽器の意義（2）	『学校音楽』（学校教育研究会）第3巻第5号（1935年5月発行）※『教育研究』第412号（1933年12月発行）掲載の再録。	p.18-23	
太田太郎	ヴァーグナー随想	『月刊楽譜』第24巻5月号（1935年5月発行）	p.39-47	
太田太郎	音楽史上のヴァーグネル	『レコード音楽』第9巻第5号（1935年5月発行）	p.6-11	
太田太郎	ビゼーとその時代	『音楽世界』第7巻第6号（1935年6月発行）※目次の表記は「ビゼエとその時代」。	p.12-21	
太田太郎	ドビュッシーと時代の関係	『レコード音楽』第9巻第6号（1935年6月発行）	p.6-14	
太田太郎講演	音楽史（ベートーヴェン迄）	社団法人東京音楽協会主催「洋楽講話」第11回、会場：日本橋三越六階ホール、1935年7月15日午後1時～ ※終了時間不明。		
太田太郎	新響への要望	『音楽雑誌フィルハーモニー』第9巻第7号（1935年8月発行）	p.30-32	
太田太郎	今シーズンの楽壇の回想と希望の数々	『音楽世界』第7巻第8号（1935年8月発行）	p.21-26	1935年夏： 中国を視察。
太田太郎	新刊紹介と書評 テリー著・村田武雄氏訳補『バッハ音楽栞』	『音楽研究』（共益商社書店）第1号（1935年10月発行）	p.89-92	
太田太郎	須永克己氏の死を悼む	『レコード音楽』第9巻第10号（1935年10月発行）	p.13-14	
太田太郎	跋	乙骨三郎『西洋音楽史』東京：京文社、1935年11月	p.1-5 （通し頁p.829-833）	
太田太郎	ヴァイオリン協奏曲 ホ長調 バッハ作（第160回定期バッハ祭曲目解説）	『音楽雑誌フィルハーモニー』第9巻第10号（1935年11月発行）※『音楽雑誌フィルハーモニー』第7巻第4号（1933年4月発行）掲載と同内容。	p.51-52	
太田太郎	メンデルスゾーンの史的意義	『月刊楽譜』第24巻12月号（1935年12月発行）	p.46-54	
太田太郎	西洋音楽史の概要（1）	『レコード音楽』第10巻第1号（1936年1月発行）	p.100-113	1936年
太田太郎解説	バルトーク「舞踊組曲」	社団法人日本放送協会東京中央放送局ラジオ放第1放送「管弦楽 近代現代の音楽第1回」（齋藤秀雄指揮、新交響楽団演奏）1936年1月13日20時30分～21時放送		
太田太郎	マーラーの交響曲	『音楽雑誌フィルハーモニー』第10巻第3号（1936年3月発行）	p.8-12	
太田太郎	超克者バルトック	『音楽評論』（音楽評論社）第4巻第6号（1936年3月発行）	p.22-29	
太田太郎	西洋音楽史の概要（2）――第2講 絶対的単旋法時代 その1	『レコード音楽』第10巻第3号（1936年3月発行）	p.101-112	
ヴァイスマン著、太田太郎訳	日常事の勝利――ラヂオと映画	『音楽研究』（共益商社書店）第3号（1936年4月発行）	p.32-42	
二見孝平、長谷川良夫、鈴木賢之進、津川主一、服部正、鯨井孝、小松平五郎、高木東六、唐端勝、太田太郎、吉本明光、吉田信	音楽協会に何を望むか	『音楽世界』第8巻第5号（1936年5月発行）	p.30-39 （太田分：p.36-37）	
太田太郎	西洋音楽史の概要（3）――第2講 絶対的単旋法時代 その2	『レコード音楽』第10巻第5号（1936年5月発行）	p.94-105	
太田太郎	質疑応答「戸塚の住人」氏の二問に対する	『レコード音楽』第10巻第5号（1936年5月発行）※目次の表記は「「戸塚の住人」氏の質疑に対する解答」。	p.110-111	
太田太郎	バッハよりベートーヴェンのピアノ名曲解説	『アルス音楽大講座 第10巻 鑑賞篇1 ピアノ・ヴァイオリンの鑑賞』東京：アルス、1936年6月	p.17-80	1936年6月： 東洋音楽学会設立。
太田太郎	中国劇音楽研究所その他――北平雑感	『音楽評論』（音楽評論社）第4巻第8号（1936年6月発行）	p.30-36, 50	
太田太郎	ヘルベルト氏を迎へて	『月刊楽譜』第25巻6月号（1936年6月発行）	p.92-97	
太田太郎	西洋音楽史の概要（4）――第2講 絶対的単旋法時代 その3	『レコード音楽』第10巻第6号（1936年6月発行）	p.106-114	
太田太郎	音楽術語の統一	『帝国大学新聞』第633号（1936年6月29日）	p.10	

著訳者・講演者	記事名・書名・演題等	雑誌名・書誌・講演場所等	ページ数	事跡
太田太郎	西洋音楽史の概要（5）――第2講 絶対的単旋法時代 その4	『レコード音楽』第10巻第7号（1936年7月発行）	p.112-124	
太田太郎	西洋音楽史の概要（6）――第2講 絶対的単旋法時代 その5	『レコード音楽』第10巻第8号（1936年8月発行）	p.92-100	
太田太郎	西洋音楽史の概要（7）――第2講 絶対的単旋法時代 その6	『レコード音楽』第10巻第9号（1936年9月発行）	p.107-119	
ヴァイスマン著、太田太郎訳	『音楽の神性脱化』	東京：共益商社書店、1936年10月	9, viii, 181, 18p	
平井保三、日比野愛次、太田太郎	来たるべきオリンピックに備へて	『音楽評論』（音楽評論社）第5巻第2号（1936年10月発行）	p.54-59 （太田分：p.57-59）	
二見孝平、太田太郎、有坂愛彦、大木正夫、秋吉元作、原太郎、山根銀二（司会）、日比野愛次、滝川広、大熊次郎、井上頼豊、長汐寿治、寺田日嵯三、宮田清蔵、上田仁、上宮勝、中村鉱次郎、大津三郎、橋本鑒三郎、小森宗太郎、齋藤秀雄、寺田豊次、辻井富次、青山治一（座談会）	ローゼンシュトック氏歓迎演奏会合評	『音楽評論』（音楽評論社）第5巻第2号（1936年10月発行）※目次の表記では、副題に「ローゼンシュトック氏を迎ふ」とある。	p.106-111	
太田太郎	楽器の形態的模倣呪と東亜に於けるその管見	『東洋音楽研究』第1輯（1936年10月発行）※『月刊楽譜』第25巻10月号（1936年10月発行）の誌面を借りて、特集「創刊廿五周年記念特別論文集、東洋音楽学会第一回研究論攷」として掲載。ただし複刻版『東洋音楽研究』（東京：第一書房、1985年）に収載の第1輯では、頁数が若干異なり、当該論文はp.27-40に掲載。	p.28-41	
太田太郎	私の音楽観照法	『レコード音楽』第10巻第11号（1936年11月発行）	p.10-14	
太田太郎	ビクター「名曲の部」ブラームスの第2ピアノ協奏曲	『音楽評論』（音楽評論社）第5巻第4号（1936年12月発行）	p.96-99	
太田太郎	西洋音楽史の概要（8）――第2講 絶対的単旋法時代 その7	『レコード音楽』第10巻第12号（1936年12月発行）	p.110-119	
太田太郎	音楽史を勉強する人の為に	『音楽世界』第9巻第1号（1937年1月発行）	p.60-70	1937年
太田太郎	流行歌の辯	『教育音楽』（日本教育音楽協会）第15巻第1号、1月号（1937年1月発行）	p.79-86	
諸家（三浦たまき、田村虎蔵、諸橋轍次、小林愛雄、矢田部勁吉、小松平五郎、伊庭孝、松島慶三、中田俊造、中川善之助、武岡鶴代、大田黒養二、大中寅二、隈部一雄、兼常清佐、野村胡堂、紙恭輔、太田太郎、佐藤寛次）はがき回答	“国民歌謡”放送への註文	『放送』1月号、第7巻第1号（1937年1月発行）	p.47-51 （太田分：p.51）	
太田太郎	西洋音楽史の概要（9）――第2講 絶対的単旋法時代 その8	『レコード音楽』第11巻第1号（1937年1月発行）	p.123-131	
太田太郎	流行歌の社会的考察	『放送』2月号、第7巻第2号（1937年2月発行）	p.24-26	
太田太郎	西洋音楽史の概要（10）――第2講 絶対的単旋法時代 その9	『レコード音楽』第11巻第2号（1937年2月発行）	p.113-126	
高畠達四郎、亀井勝一郎、甘粕石介、増沢健美、野村光一、小森宗太郎、太田太郎、池内友次郎、秋吉元作、清瀬保二、大木正夫、井上頼豊、鯨井孝、園部三郎、原太郎、山根銀二（座談会）	新響コンクール合評会	『音楽評論』（音楽評論社）第6巻第3号（1937年3月発行）※目次の表記は「新響作曲コンクール合評会」。	p.14-33	
太田太郎	音楽時評――楽壇に巣立つ人々へ	『音楽評論』（音楽評論社）第6巻第3号（1937年3月発行）	p.62-64	
太田太郎	浪花節を考へる	『放送』3月号、第7巻第3号（1937年3月発行）	p.44-45	
太田太郎	西洋音楽史の概要（11）――第2講 絶対的単旋法時代 その10	『レコード音楽』第11巻第3号（1937年3月発行）	p.114-121	

著訳者・講演者	記事名・書名・演題等	雑誌名・書誌・講演場所等	ページ数	事跡
太田太郎	先覚者伊庭孝氏の死を悼む	『レコード音楽』第11巻第4号（1937年4月発行）	p.37-38	1937年4月： 欧米視察に出発。
太田太郎	最近の欧米における音楽教育の趨勢――帰朝談	『音楽世界』第10巻第4号（1938年4月発行）※目次の表記は「最近の欧米における音楽教育」。	p.48-52	1938年3月： 欧米視察より帰国。 日本放送協会洋楽課長に就任。
太田太郎	1937年国際現代音楽祭の追憶	『月刊楽譜』第27巻4月号（1938年4月発行）	p.45-51	
太田太郎	フルトウェングラーを聴く――欧米楽界の印象（1）	『レコード音楽』第12巻第4号（1938年4月発行）	p.26-31	
太田太郎	最近のフランス音楽	『あみ・ど・ぱり』第6巻第6号、6月号（1938年5月発行）	p.32	
太田太郎、田村虎蔵、大塚正則、吉本明光、岡松真尚、相島敏夫、原信子、加田愛咲、池内友次郎、石一郎（座談会）	洋楽放送の明日を語る――太田AK新洋楽課長に訊く	『音楽世界』第10第5号（1938年5月発行）	p.74-96	
太田太郎	トスカニーニの指揮振り――欧米楽界の印象（2）	『レコード音楽』第12巻第5号（1938年5月発行）	p.30-35	
太田太郎	欧米見聞記（1）――ラヂオ・映画・音楽	『東京朝日新聞』1938年5月9日朝刊	p.7	
太田太郎	欧米見聞記（2）――民謡の再興熱	『東京朝日新聞』1938年5月10日朝刊	p.7	
太田太郎	欧米見聞記（3）――大衆音楽の隆盛	『東京朝日新聞』1938年5月11日朝刊	p.7	
太田太郎	欧米見聞記（4）――音楽の公共施設	『東京朝日新聞』1938年5月12日朝刊	p.7	
太田太郎	1937年度国際児童音楽協会パリ会議の概況（1）	『学校音楽』（学校教育研究会）第6巻第6号、6月号（1938年6月発行）※目次の表記は「1937年度国際児童音楽協会パリー会議概況（1）」。	p.2-4	
太田太郎	欧米楽界の印象記	『放送』6月号、第8巻第6号（1938年6月発行）※『東京朝日新聞』欧米見聞記（1）～（4）（1938年5月9日～12日朝刊）の再録。	p.39-42	
業務局文芸部洋楽課（太田太郎口述）	新企画『国民詩曲』――日本国民音楽の創造へ	『放送』6月号、第8巻第6号（1938年6月発行）	p.31-34	
太田太郎	ザックス博士との会見記――欧米楽界の印象（3）	『レコード音楽』第12巻第6号（1938年6月発行）	p.39-43	
太田太郎	怪我の功名――ライプチッヒ博物館を訪れて	『帝国大学新聞』第726号（1938年6月27日発行）	p.10	
太田太郎	統制下のドイツ楽界管見	『音楽研究』（共益商社書店）第3巻第4号（1938年7月発行）	p.60-70	
太田太郎	1937年度国際児童音楽協会パリ会議の概況（2）	『学校音楽』（学校教育研究会）第6巻第7号、7月号（1938年7月発行）※目次の表記は「1937年度国際児童音楽協会パリー会議概況（2）」。	p.2-7	
太田太郎、井上武士、上田友亀、小林つやえ、柴田知常、玉村なみ子（座談会）	太田太郎氏に欧米視察談を聴く会――昭和13年5月13日	『学校音楽』（学校教育研究会）第6巻第7号、7月号（1938年7月発行）	p.8-23	
太田太郎	欧米音楽行脚の覚書から（上）	『東洋音楽研究』第1巻第3号（1938年7月発行）	p.41-47	
太田太郎	ミュンヘンの音楽祭（上）――欧米楽界の印象（4）	『レコード音楽』第12巻第7号（1938年7月発行）	p.22-27	
太田太郎	1937年度国際児童音楽協会パリ会議の概況（3）	『学校音楽』（学校教育研究会）第6巻第8号、8月号（1938年8月発行）※目次の表記は「1937年度国際児童音楽協会パリー会議概況（3）」。	p.45-50	
太田太郎	ミュンヘンの音楽祭（中）――欧米楽界の印象（5）	『レコード音楽』第12巻第8号（1938年8月発行）	p.19-23	
太田太郎	ミュンヘンの音楽祭（下）――欧米楽界の印象（6）	『レコード音楽』第12巻第9号（1938年9月発行）	p.32-37	
（太田太郎）	伯林フィルハーモニーの演奏旅行規定	『音楽雑誌フィルハーモニー』第12巻第9号（1938年10月）※目次・本文には著者名記載なし。本文冒頭の編輯部説明によると、ベルリンフィルハーモニーの演奏旅行の規定を太田太郎より借り受けて掲載したとのこと。	p.28-31	
太田太郎	モイーズと語る――欧米楽界の印象（7）	『レコード音楽』第12巻第10号（1938年10月発行）	p.41-46	
文芸部洋楽課（太田太郎）	漢口陥落と洋楽放送	『放送』11月号、第8巻第11号（1938年11月発行）※目次の表記では「"漢口落つるとき"漢口攻略と放送活動」の特集記事の中に「洋楽放送」とある。	p.77-79	
太田太郎	ランドフスカ夫人とクラヴサン音楽――欧米楽界の印象（8）	『レコード音楽』第12巻第11号（1938年11月発行）	p.36-42	
社団法人日本放送協会編、社団法人大日本音楽協会楽語統一調査事業委員会編（太田は委員として参加）	『社団法人日本放送協会採定 標準洋楽語彙』	東京：共益商社書店、1938年12月	254p	

著訳者・講演者	記事名・書名・演題等	雑誌名・書誌・講演場所等	ページ数	事跡
太田太郎	欧米音楽行脚の覚書から（下）	『東洋音楽研究』第1巻第4号（1938年12月発行）	p.61-69	
太田太郎	演奏会の種々相――欧米楽界の印象（9）	『レコード音楽』第12巻第12号（1938年12月発行）	p.48-54	
太田太郎	楽聖ベートーヴェン	『音楽世界』第11巻第1号（1939年1月発行）	p.12-14	1939年
太田太郎	仏蘭西の女流歌手垣見――欧米楽界の印象（10）	『レコード音楽』第13巻第1号（1939年1月発行）	p.38-43	
太田太郎	吹奏楽器研究の至宝――平林勇君の死を悼む	『吹奏楽 ブラスバンド 喇叭鼓隊ニュース』第5巻第2号、2月号（1939年2月発行）	p.3-4	
太田太郎	新旧ロシヤの合唱団――欧米楽界の印象（11）	『レコード音楽』第13巻第2号（1939年2月発行）	p.43-50	
太田太郎	薄幸の天才平林君の死	『レコード音楽』第13巻第2号（1939年2月発行）	p.130-131	
太田太郎	“標準洋楽語彙”成る	『放送』3月号、第9巻第3号（1939年3月発行）	p.46-47	1939年3月： 音楽博物館建設準備委員会発足。
太田太郎	属啓成氏著 ライカ行脚「独逸楽聖遺跡」	『東京朝日新聞』1939年3月20日朝刊	p.4	
太田太郎	属啓成氏著 ライカ行脚「独逸楽聖遺跡」	『書斎』（三省堂）第3巻第4号、4月号、通巻21号（1939年4月発行）※『東京朝日新聞』1939年3月20日朝刊掲載の再録。	p27-28	
太田太郎	レコード蒐集所ところどころ――欧米楽界の印象（12）	『レコード音楽』第13巻第4号（1939年4月発行）	p.33-41	
太田太郎	ハンガリーの印象――欧米楽界の印象（13）	『レコード音楽』第13巻第5号（1939年5月発行）	p.40-47	
太田太郎	ドイツの楽器製造地マルクノイキルヘンの想ひ出――欧米楽界の印象（14）	『レコード音楽』第13巻第6号（1939年6月発行）	p.55-62	
（太田太郎講演）	（博物館の必要と欧米に於ける博物館）	音楽博物館建設準備委員会・文部省東京科学博物館共同主催「東亜音楽文化展覧会」講演会、会場：上野公園内東京科学博物館講堂、1939年6月16日午後 ※都合により、黒沢隆朝による代講となったとのこと。代講の内容は、黒沢が太田の原稿を代読したものか、黒沢による別個のものであるのか不明。		
太田太郎解説	『ベートーヴェン作品21 交響曲第1番ハ長調』	SPレコード『ベートーヴェン 交響曲第1番 ハ長調作品21』（トスカニーニ指揮、BBC交響管弦団、1937年10月25日・1938年6月2日録音、東京：日本ビクター蓄音機株式会社、1939年7月発売、JD-1546～9、JAS-746）の附録解説冊子	38p	
太田太郎	レコード ベートーヴェンの第1交響曲（V）	『月刊楽譜』第28巻7月号（1939年7月発行）※SPレコード『ベートーヴェン 交響曲第1番 ハ長調作品21』（1939年7月発売）の附録解説冊子より一部抜粋し再録。	p.69-76	
太田太郎	世界唯一の音楽史音楽学校――欧米楽界の印象（15）	『レコード音楽』第13巻第8号（1939年8月発行）	p.23-29	
太田太郎	シベリアを経て伯林へ――欧米楽界の印象（16）	『レコード音楽』第13巻第9号（1939年9月発行）	p.61-70	
太田太郎	トスカニーニ頌	『レコード音楽』第13巻第10号（1939年10月発行）	p.120-123	
太田太郎	スカンヂナヴィアの旅（1）ストックホルム訪問記――欧米楽界の印象（17）	『レコード音楽』第13巻第11号（1939年11月発行）	p.57-68	
太田太郎	スカンヂナヴィアの旅（2）オスローよりコペンハーゲンへ――欧米楽界の印象（18）	『レコード音楽』第13巻第12号（1939年12月発行）	p.132-136	
太田太郎	竹内黙庵著 木魚	『東京朝日新聞』1939年12月10日朝刊	p.8	
太田太郎	スカンヂナヴィアの旅（3）コペンハーゲンとハンブルグへの旅――欧米楽界の印象（19）	『レコード音楽』第14巻第1号（1940年1月発行）	p.60-66	1940年
太田太郎	歌劇「レーグロン」――欧米楽界の印象（20）	『レコード音楽』第14巻第2号（1940年2月発行）	p.25-31	
太田太郎	竹内黙庵著 木魚	『満洲読書新報』第35号、1940年2月15日 ※『東京朝日新聞』1939年12月10日朝刊掲載の再録。	p.6（通し頁p.226）	
小野文芸部長、小林徳二郎、北村寿雄（以上2名演芸課）、太田太郎、大塚正則、有坂愛彦（以上3名洋楽課）（座談会）	放送問答――慰安放送	『放送』4月号、第10巻第4号（1940年4月発行）	p.96-100	
太田太郎	音楽とレコード	『現代教養講座 第8巻 現代の芸術』東京：三笠書房、1940年6月	p.171-211	
太田太郎	トスカニーニ指揮 ベートーヴェン第4交響曲	『会館芸術』第9巻第9号、9月号（1940年9月発行）	p.37-39	
太田太郎	音楽宣撫工作視察の旅――南京（1）	『レコード音楽』第15巻第1号（1941年1月発行）※目次の表記は「音楽宣撫工作視察の旅（1）」。	p.20-26	1941年1月： 日本放送協会音楽部長に就任。
太田太郎	音楽宣撫工作視察の旅――南京（2）	『レコード音楽』第15巻第2号（1941年2月発行）※目次の表記は「音楽宣撫工作視察の旅（2）」。	p.28-31	
あらえびす、有坂愛彦、青砥道雄、太田太郎、田辺秀雄、信時潔、野村光一、長島卓二、佐野健児	座談会 日本吹込レコードとその将来――「奉祝楽曲」「海道東征」を中心に	『レコード音楽』第15巻第4号（1941年4月発行）	p.113-138	

著訳者・講演者	記事名・書名・演題等	雑誌名・書誌・講演場所等	ページ数	事跡
堀内敬三、新居格、小林德二郎、太田太郎、喜多壮一郎	放送4月新体制に要望する座談会7――海外放送と国民音楽	『読売新聞』1941年4月3日全国版夕刊	p.3	
太田太郎	挨拶（天長節奉祝 吹奏楽大演奏会）	『吹奏楽月報』第8巻第5号、5月号（1941年5月発行）	p.27	
太田太郎	音楽宣撫工作視察の旅（3）――上海中国人の音楽趣味とその動向（1）	『レコード音楽』第15巻第5号（1941年5月発行）	p.18-22	
太田太郎	音楽宣撫工作視察の旅（4）――上海中国人の音楽趣味とその動向（2）	『レコード音楽』第15巻第6号（1941年6月発行）※目次の表記は「上海中国人の音楽趣味とその動向(2)」。	p.18-22	
太田太郎	管絃楽附ソプラノ独唱 モテット「エクスルターテ・ユビラーテ」（ケッヘル番号第165）モーツァルト作（定期公演曲目解説 第233回）	『音楽雑誌フィルハーモニー』第16巻第2号、2月号（1942年2月発行）※目次の表記は「モーテット「エクスルターテ・ジュビラーテ」（モーツァルト）」。	p.37-38	1942年2月：日本放送協会を休職。
太田太郎	音楽の鑑賞（上）	『文部時報』第753号（1942年3月11日発行）	p.28-33	
太田太郎	音楽の鑑賞（下）	『文部時報』第754号（1942年3月21日発行）	p.21-26	
太田太郎	ザックス博士の業蹟	『音楽教育』（大日本出版株式会社）第4巻第5号、6月号（1942年6月発行）	p.96-104	1942年7月：日本放送協会を退職。
諸家（大塚正則、宮沢縦一、堀内敬三、京極高鋭、広岡九一、和田小太郎、伊藤昇、太田太郎、高丘黒光、渡辺弥蔵、安倍盛、三戸知章、武富邦茂）はがき回答	吹奏楽――名曲に就いて	『吹奏楽』第2巻第9号、9月号（1942年9月発行）	p.30-31（太田分：p.31）	
太田太郎	マイヨン四綱楽器分類法の源流として観たる印度の楽器分類法	『田辺先生還暦記念 東亜音楽論叢』東京：山一書房、1943年8月	p.139-156	1943年10月：北海道にて調査。
				1945年8月：没。

没後に発表されたもの

太田太郎	アイヌの気鳴楽器	『東洋音楽研究』第9号（1951年2月発行）	p.47-69 英文要旨：横組p.5-6
太田太郎	跋	乙骨三郎『西洋音楽史 下』（音楽文庫）東京：音楽之友社、1955年3月 ※乙骨三郎『西洋音楽史』（東京：京文社、1935年11月）の再編集。	p.1-4 （通し頁p.689-692）
太田太郎	マーラーの交響曲	『N響名曲事典 第4巻』東京：平凡社、1958年10月 ※『音楽雑誌フィルハーモニー』第10巻第3号（1936年3月発行）掲載の再録。	p.150-153
太田太郎	フルトヴェングラーを聴く	CD『ウェーバー「魔弾の射手」序曲、ブラームス交響曲第1番』（ヴィルヘルム・フルトヴェングラー指揮、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、1952年12月8日・1952年2月10日録音、日本：GRAND SLAM、2015年2月27日発売、GS-2127）の解説 ※『レコード音楽』第12巻第4号（1938年4月発行）掲載の転載。	頁数無記載（見返しをp.1として、p.1-6）
太田太郎	フルトヴェングラーを聴く	CD『ウェーバー「魔弾の射手」序曲、ブラームス交響曲第1番』（ヴィルヘルム・フルトヴェングラー指揮、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、1952年12月8日・1952年2月10日録音、日本：GRAND SLAM、2020年11月19日発売、GS-2227）の解説 ※『レコード音楽』第12巻第4号（1938年4月発行）掲載の転載。	頁数無記載（見返しをp.1として、p.1-6）

未刊行

クルト・ザックス著、太田太郎訳補	『印度とインドネシアの楽器』	東京：冨山房、1945年頃の刊行を予定か	300pを予定
ライヒテントリット著、太田太郎・橋本清司共訳	『楽式論』	東京：冨山房、1945年頃の刊行を予定か ※のちに橋本清司訳『音楽の形式』（東京：音楽之友社、1955年6月）として出版。ただし、長谷川良夫「推薦者のことば」によれば、当初から橋本のみの筆によるとのこと。	622pを予定
太田太郎	『西洋音楽史辞典（附：術語楽器）』	東京：冨山房 ※詳細不明。	不明

太田訳の可能性のあるもの

太田太郎	「世界木棉戦」を読む	『綿工聯』第60号9月号（1940年8月発行）	p.86-94
パウル・G・エルハルト著、太田太郎訳	独逸人造繊維発展の素描	『人絹』第4巻第12号、12月号（1940年12月発行）	p.23-35